令和４年度　学校経営計画に対する中間報告書

石川県立羽咋工業高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の扱い(改善策等)
1　生徒全員の進路実現のため、全教職員が、新学習指導要領の目的に沿ってタブレット等のＩＣＴ機器を日常の学習ツールとして活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通じて主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組むことで、学びの質を向上させる。また、資格取得を奨励し生徒の学力向上に努める。	①　思考力・表現力・コミュニケーション力の向上のため、タブレット等のＩＣＴ機器を効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」を主とした公開授業・研究授業に取り組む。	１年間に実施した公開授業・研究授業等の、教員１人あたりの平均回数が Ａ　３．０回／人　以上 Ｂ　２．７回／人　以上 Ｃ　２．４回／人　以上 Ｄ　２．４回／人　未満	教員対象に７月に調査 １学期中に実施された公開授業・研究授業・・・・・７回 （０．２回／人） 評価：Ｄ	１学期にタブレット等を用いた公開授業・研究授業を実施できたのは２９名中７名で、教員１人当たりでは０．２回と、基準の２．７回に遠く及ばない結果となった。授業進度との兼ね合いで公開授業の実施時期を逸した教員や、試行錯誤の部分があることに対する気後れから公開授業に踏み切れなかった教員が少なくないと考えられる。 後期は、気軽に公開授業を実施できる雰囲気を作るとともに、１学期で未実施の教員を中心に、公開授業等の実施を積極的に促していきたい。
	②　学力向上を図るために、教科の宿題やレポートの出題方法と回数を工夫するとともに、授業と資格取得の補習指導を通して、家庭等での自学自習する習慣を身につけさせる。	宿題・レポート・資格取得などの自学自習について Ａ　十分取り組むことができた Ｂ　おおむね取り組むことができた Ｃ　あまり取り組むことができなかった Ｄ　全く取り組むことができなかった	生徒対象に ７月にアンケート調査 Ａ：54%　Ｂ：40% Ｃ：　5%　Ｄ：　1% 評価：Ａ・Ｂ合わせて 94%	Ａ・Ｂ合わせた評価は９４％と、判定基準の８０％を上回り、前年度同期（９７％）同様に高い結果となった。資格取得等に向けて意識の高い生徒が数多くおり、前向きに取り組んでいることが伺える。ただし、同時期に実施した「学習状況アンケート」では、「試験期間以外の家庭学習」を「ほとんどしなかった」と回答した生徒が２４％にのぼっている。 後期も、資格取得も含めた家庭学習が習慣化し、学力向上につながるように働きかけを継続していきたい。
	③　毎月、図書便りを発行し全教員の「お薦めの本」を紹介するとともに、「読書週間」などの読書運動を全校的に行い、読書の習慣を身につけさせる。	朝読書週間を含む個人的な読書、授業や課題研究等の学習で、図書館の書籍を Ａ　おおいに利用した Ｂ　ある程度利用した Ｃ　あまり利用しなかった Ｄ　全く利用しなかった	生徒対象に ７月にアンケート調査 Ａ：23%　Ｂ：18% Ｃ：30%　Ｄ：29% 評価：Ａ・Ｂあわせて 41%	Ａ・Ｂ合わせた評価は４１％と、判定基準の５０％に届かず、前年度同期（４９％）をも下回る結果となった。１学期に実施した２年生の読書週間の際、各クラスに学級文庫を設置したことが図書館利用にとっては裏目に出たものと考える。 後期は、学級文庫の設置についてはあらためて検討するとともに、２学期の新着図書到着に合わせ、主に国語科と連携して、クラスごとに図書館利用の機会を設けることを計画している。
	④　ジュニアマイスター顕彰のゴールド特別表彰およびゴールド・シルバー・ブロンズの取得を目指し、学校全体で多くの資格・検定への挑戦意識を高めるため、積極的な奨励を行い、認定者数を増加させる。	ジュニアマイスター顕彰ゴールドおよびシルバーの認定者数が学校全体で Ａ　６０人以上 Ｂ　５０人以上 Ｃ　４０人以上 Ｄ　４０人未満	前期（７月）の認定者数を検証 前期認定者数　５人 評価：Ｄ	前期での認定者数は５人で、その内訳はゴールド取得者が１人、シルバー取得者が４人であった。前年は後期だけで６５人が認定されており、今年度も後期での増加に期待したいが、現状は厳しいと考える。特に、得点の高い「技能検定」について、外部の団体がこれまで行ってきた受検料補助が今年度はなくなったことから受検者が大幅に減少しており、ジュニアマイスターの認定者数にも影響が出る見通しである。 後期は、資格・検定に挑戦しようとする機運が生徒の間で一層高まるよう、より組織的に資格取得を促す体制づくりに努めたい。
	⑤　インターンシップや地元企業説明会等により適切な進路選択を促すとともに、進路説明会やＬＨなどで進路に向けた情報提供を行なう。	各種の進路指導行事・ＬＨや懇談会での説明や進路情報により、生徒の進路意識が Ａ　たいへん高まった Ｂ　ある程度高まった Ｃ　あまり変わらなかった Ｄ　全く変わらなかった	保護者対象に ７月にアンケート調査 Ａ：27%　Ｂ：43% Ｃ：　5%　Ｄ：　0% 回答不能(よく分からない)：25% 評価：Ａ・Ｂあわせて 70%	Ａ・Ｂ合わせた評価は７０％と、判定基準の８０％に届かなかった。４分の１（２５％）の保護者が「回答不能（よく分からない）」と回答しており、保護者に対して進路情報の提供が十分とは言えないことが明らかとなった。 後期は、１年生・２年生に多くの進路行事が控えており、段階や時期に応じた適切な進路指導を行うとともに、生徒の進路意識の高まりが保護者に伝わるようにするための手立てを検討したい。
	⑥　進路希望の達成のために指導の充実を図る。 基礎学力の定着を図ると共に、授業でコミュニケーション力をつけさせる工夫を行う。 外部講師による講演や面接指導、全教員による個別面談・指導を充実させる。	朝学習や日頃の学習、面接指導などにより、基礎学力やコミュニケーション力が Ａ　たいへんついた Ｂ　ある程度ついた Ｃ　あまりつかなかった Ｄ　全くつかなかった	３年生対象に ７月にアンケート調査 Ａ：58%　Ｂ：40% Ｃ：　2%　Ｄ：　0% 評価：Ａ・Ｂあわせて 98%	Ａ・Ｂ合わせた評価は９８％と、判定基準の９０％を上回り、前年度同期（９５％）と同様に高い結果となった。１・２年生の朝学習では基礎学習を中心に実施、３年生は進路別に問題集などに取り組んでいる。 今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響もなく運営できているので、後期も、就職・進学試験に向けた面接指導等の充実に全教員が協力して取り組んでいきたい。
		１回目の就職試験における内定率が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	１０月末における内定率を検証する	

学校関係者評価委員会の評価	○読解力を身に付けるためには本を読み続けることが重要。ジャンルに関係なく、生徒の読みたい本がすぐに図書館に入ると良い。 ○資格試験の参考書やスポーツの専門誌など、学校が行っている取組に紐付けた図書を充実させれば図書館の利用者が増えるのではないか。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	○購入希望図書のアンケートは年２回行っているが、随時受付ができないか検討する。 ○資格や部活動に関連する専門書について現状を把握し、今後の充実を検討する。

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の扱い(改善策等)
2　身ともに健康で逞しい(タフな)人づくりを目指し、部活動や生徒会活動の活性化に努めるとともに、規範意識を高め、いじめを見逃さない学校づくりに努める。	①　県高校総体・新人大会で団体・個人とも上位入賞を目指し、上位大会出場を目指す。	県高校総体・新人大会等で北信越以上の大会に進出した運動部の数が A　７以上 B　５以上 C　４以上 D　４未満	県総体結果 ５つの部が北信越以上の大会に進出した。 評価：B	県総体では、各部とも健闘し、陸上競技部、卓球部、剣道部、ソフトテニス部、ヨット部の５つが北信越以上の大会に出場した。 後期に行われる新人大会における一層の健闘を期待したい。
	②　文化部の重複加入を奨励し、各部の取組に生徒が積極的に活動し、より良い成果を収める。	文化部の活動と成果に A　たいへん満足している B　おおむね満足している C　あまり満足していない D　全く満足していない	文化部加入生徒対象に ７月にアンケート調査 A：54%　B：44% C：2%　D：0% 評価：A・B合わせて　98%	A・B合わせた評価は９８％と、判定基準の８０％を上回り、前年度同期（９６％）と同様に高い結果となった。今年は新型コロナウイルス感染症以前のような活動ができるようになってきており、生徒は前向きに取り組んでいる。 後期については、現状に満足していない生徒も満足できるような活動を生徒とともに考えていきたい。
	③　生徒会を中心にして行事への参画意識を高め、生徒が自主的に活動する行事にする。	生徒会行事に A　たいへん満足している B　おおむね満足している C　あまり満足していない D　全く満足していない	生徒対象に ７月にアンケート調査 A：54%　B：43% C：3%　D：0% 評価：A・B合わせて 97%	A・B合わせた評価は９７％と、判定基準の８５％を上回り、前年度同期（９７％）と同様に高い結果となった。新型コロナウイルス感染症対策を行いながら、例年どおりの行事が行えるように工夫をしてきた結果だと考えられる。 後期も多くの行事が予定されており、伝統ある行事をなくさないよう、生徒がより満足して参加できるような行事運営を目指したい。
	④　規則やマナーを守り、思いやりの心を育むため、生徒への声かけや観察を行い、生徒との相互理解を深め、規範意識といじめ防止の意識を高める。	本校の教育活動や規範意識向上の取組により、規範意識やいじめ防止の意識が A　十分身についた B　少し少し身についた C　あまり身についていない D　全く身についていない	生徒対象に ７月にアンケート調査 A：81%　B：18% C：1%　D：0% 評価：A・B合わせて 99%	A・B合わせた評価は９９％と、判定基準の９０％を上回り、前年度同期（１００％）と同様に高い結果となった。「朝の挨拶運動」や「規範意識週間」「校内巡視」等の取組に加えて、「通学自転車の施錠」や「校内におけるスマートフォン(携帯電話)の使用禁止」等の指導をこまめに行うことによって、生徒の規範意識やいじめ防止の意識が高まったものと考えられる。 後期も、引き続き取組を継続し、生徒の行動が変容するよう工夫していきたい。
	⑤　保健だよりや掲示物、集会、ＳＨ等を利用して、生徒の心身の健康管理についての意識の高揚をはかる。	自分自身の心と体の健康管理について A　常に意識している B　ある程度意識している C　あまり意識していない D　全く意識していない	生徒対象に ７月にアンケート調査 A：58%　B：37% C：5%　D：0% 評価：A・B合わせて 95%	A・B合わせた評価は９５％と、判定基準の８０％を上回った。前年度同期（９２％）と比較して３％上昇し、特に「A（常に意識している）」と回答した生徒の割合は前年度の４７％から１１％も増加した。新型コロナウイルス感染症対策への意識の定着が要因と考える。 後期も引き続き、「保健だより」や掲示物、羽工祭等で生徒への働きかけを積極的に行いたい。また、毎朝の検温、手指消毒や手洗い、マスクの着用等の丁寧な指導も継続して行い、生徒の意識の向上につながるよう働きかけていきたい。
3　社会貢献や環境に対する意識を高めるため、工業学習成果の提供やボランティア活動等を積極的に行い、地域社会との連携を深める。	①　社会に貢献することの大切さや必要性を認識するために、地域ボランティア活動や校内外での一日一善運動を推奨する。	地域ボランティア活動や一日一善運動を通して社会貢献の大切さを A　十分理解している B　ある程度理解している C　あまり理解していない D　全く理解していない	生徒対象に ７月にアンケート調査 A：68%　B：28% C：4%　D：0% 評価：A・B合わせて　96%	A・B合わせた評価は９６％と、判定基準の８５％を上回り、前年度同期（９７％）と同様に高い結果となった。６月の海岸ボランティア清掃では、清掃後の海岸や分別されたゴミの様子から、生徒が真剣に取り組んだことがうかがえ、社会貢献の大切さを十分理解していることが確認できる。 後期も日々の「一日一善運動」や秋のボランティア清掃などを通して、社会貢献の大切さを訴えていきたい。
	②　環境保全のこれまでの取組を向上させ、ゴミ分別や環境保全が正しく行われているかを評価し、環境に対する意識の向上を目指す。	環境保全活動(ゴミの分別・節水・節電等)に A　常に意識して取り組んでいる B　ある程度取り組んでいる C　あまり取り組んでいない D　全く取り組んでいない	生徒対象に ７月にアンケート調査 A：58%　B：34% C：7%　D：1% 評価：A・B合わせて 92%	A・B合わせた評価は９２％と、判定基準の８０％を上回ったが、前年度同期（９５％）と比較して３％低くなった。実際、燃えるゴミにペットボトルや空き缶が混在しているような状況も一部において見られる。 後期については、これまでの取組を継続する一方、ゴミを分別しやすい環境づくりを進めたり、節水・節電についてポスター掲示等で啓発活動を行ったりすることで、生徒の意識と実践力をより高めていきたい。
4　教職員相互の業務点検による平準化で業務を分担するとともに、協力体制を構築し、更なる働き方改革を推進する。	①　校務分掌ごとに業務内容を点検して改善に努めるとともに、協力体制を構築して組織的な業務の平準化を進める。	自らが担当する業務を改善するとともに他の職員が担当する業務に協力することで、業務の平準化に A　十分努力している B　ある程度努力している C　あまり努力していない D　全く努力していない	教員対象に ７月にアンケート調査 A：14%　B：60% C：20%　D：6% 評価：A・B合わせて　74%	A・B合わせた評価は７４％と、判定基準の７０％を上回ったが、前年度同期（９２％）と比較して１８％も低くなった。その要因として、今年度は新教育課程の評価基準の作成、生徒１人１台端末の配付、６０周年記念事業など、例年にない行事等が立て込んだことで、他のサポートに回る余裕がなかった可能性がある。 後期は、重複した業務の見直しや、パソコンを利用したアンケート実施など、働き方改革を進めていく上で作業の効率化の余地が残っている部分に着目し、各分掌内において協議をするとともに、業務の平準化や多忙化改善に向けた取組を進めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		○資格取得の勉強を地域住民と生徒が一緒に行うなど、生徒と住民が直接交流できる機会を設けられないか。 ○暗い駅前に照明を設置するなど、地域が必要とする物品を提供してもらえるとありがたい。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策		○地域共同避難訓練のように、住民と生徒が直接交流できる機会を設けることができないか検討する。 ○工業学習の成果を地域に還元する取組につなげるため、地域のニーズを汲み取るための工夫を検討していきたい。		